地図でめぐる
茅ケ崎と藝能
川上音二郎・貞奴を中心に

【写真】茅ケ崎の自宅での音二郎・貞奴夫妻（川上初 蔵）

茅ケ崎の歴史と藝能

ある夏の日、東京から一人の青年が鉄砲道の中ほどの小さな家に住むアメリカ婦人を訪ねた。何十年か後の劇作家岩田豊雄（獅子文六）はレオニー・ギルモアとその息子**イサム・ノグチ**と茅ケ崎海岸で遊んだのどかな一日について随筆に書き残した。その日の午後、青年は砂の上を素足で歩くイサム少年に先導されてすでに主のいない團十郎邸を訪ねる。

「ねえダンジュウロウは偉いゲイシャだろ？」とためらいがちに訊ねる少年に「ヤクシャ」だと笑いながら岩田青年は応えた。少年はその頃茅ケ崎にまだあった**川上音二郎・貞奴（さだやっこ）**の屋敷萬松園についても聞かされていたのだろう。イサムの父野口米次郎（よねじろう）はかつて茅ケ崎海岸でアメリカの新聞のために貞奴にインタヴューをしたことがあった。明治三十五年秋から約一年間に限られるが、最晩年の團十郎、川上夫妻、少年**土方与志（ひじかたよし）**、その友人**友田恭助**、さらには壮士演歌の**添田唖蝉坊（そえだあぜんぼう）**までもがほぼ同時に茅ケ崎にいたことになる。いずれもが近代日本芸能、演劇史に名前を残した。茅ケ崎の土地と自然が近代の舞台芸術を生んだ土壌の一部であった。

明治三十六年の初春、川上家を訪ねた作家江見水蔭（えみすいいん）を茅ケ崎館に案内するため貞奴は松林を歩いていた。江見は日本の舞台に立つことに悩んでいた帰国後の貞奴に、シェークスピアの「オセロ」のヒロインを演じるよう説得した。彼女が日本女優第一号となる決心を固めたのは茅ケ崎の黒く粗い砂の上のことであった。

茅ケ崎市美術館館長　小川　稔

明治の記憶が色濃く残る大正初期、**九世市川團十郎（だんじゅうろう）**の旧宅孤松庵（こしょうあん）はまだ人々の話題となっていたようだ。豊雄（獅子文六）はレオニー・ギルモアとその息子**イサム・ノグチ**と茅ケ崎海岸で遊んだのどかな一日について随筆に書き残した。その日の午後、青年は砂の上を素足で歩くイサム少年に先導されてすでに主のいない團十郎邸を訪ねる。

「ねえダンジュウロウは偉いゲイシャだろ？」とためらいがちに訊ねる少年に「ヤクシャ」だと笑いながら岩田青年は応えた。少年はその頃茅ケ崎にまだあった**川上音二郎・貞奴（さだやっこ）**の屋敷萬松園についても聞かされていたのだろう。イサムの父野口米次郎（よねじろう）はかつて茅ケ崎海岸でアメリカの新聞のために貞奴にインタヴューをしたことがあった。明治三十五年秋から約一年間に限られるが、最晩年の團十郎、川上夫妻、少年**土方与志（ひじかたよし）**、その友人**友田恭助**、さらには壮士演歌の**添田唖蝉坊（そえだあぜんぼう）**までもがほぼ同時に茅ケ崎にいたことになる。いずれもが近代日本芸能、演劇史に名前を残した。茅ケ崎の土地と自然が近代の舞台芸術を生んだ土壌の一部であった。

明治三十六年の初春、川上家を訪ねた作家江見水蔭（えみすいいん）を茅ケ崎館に案内するため貞奴は松林を歩いていた。江見は日本の舞台に立つことに悩んでいた帰国後の貞奴に、シェークスピアの「オセロ」のヒロインを演じるよう説得した。彼女が日本女優第一号となる決心を固めたのは茅ケ崎の黒く粗い砂の上のことであった。

茅ケ崎市美術館館長　小川　稔

茅ケ崎の歴史と藝能　登場人物と主要場所

川上音二郎・貞奴

【写真】川上初 蔵

川上音二郎（一八六四―一九一一年）は文久四年一月一日、筑前国博多中対馬小路町（現在の福岡市博多区対馬小路）に生まれました。十代の終わりから、自由民権運動に関わるようになり、街頭や芝居小屋で、演説を始めました。彼が生み出した『**オッペケペー節**』は、当時の世情を風刺したユニークなパフォーマンスが受け、日清戦争時に大流行しました。明治時代は、あらゆる事柄が刷新され、古いものに代えて新しいものを手作りする「改良」が若者たちにまかされた時代でもありました。音二郎も、古い歌舞伎に対抗して書生芝居を立ち上げ、評判となります。

一八九四年、音二郎は人気芸者の貞奴（一八七一―一九四六年）と結婚しました。二人は新しい演劇活動の道を海外に求め、一八九九年から二回にわたり、アメリカやヨーロッパ各国など十カ国以上もの国を訪れ、各地で興行を重ねました。当初は苦難の連続でしたが、やがて貞奴の舞踊は世界の人々を魅了し、「**マダム貞奴**」は世界的な人気者となりました。彼らは第二回目の海外渡航を終えたあと、明治三十五年（一九〇二年）に、尊敬する九代目市川團十郎を慕い、茅ケ崎に居を構えました。欧米で近代演劇の見聞を広めてきた彼らは、茅ケ崎を日本での演劇活動の拠点としようとも考えたのです。彼らの自宅「**萬松園**」は、現在茅ケ崎市美術館の建っている場所にありました。明治三十六年、音二郎たちは東京明治座でシェークスピアの「**オセロ**」を日本初演し、貞奴は日本の女優第一号として、舞台に立ちました。準備のための稽古場として使われた旅館・茅ケ崎館は、今日に歴史を伝える日本旅館です。

茅ケ崎館

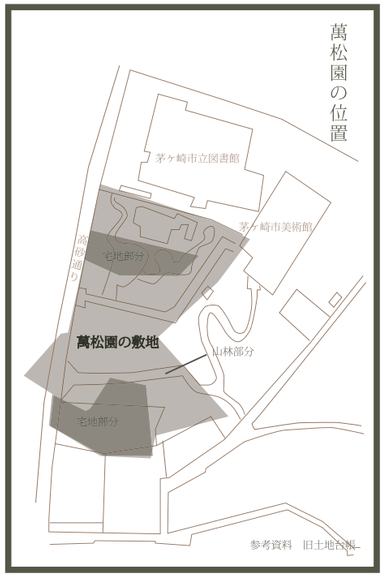
明治三十二年創業の旅館。明治時代より、海水浴客や、結核療養所の南湖院への見舞い客などのほか、多くの文化人にも愛されてきた旅館です。明治時代には、川上音二郎一座が「オセロ」日本初演の際、本読みの稽古場として使用しました。また作家国木田独歩が南湖院療養中には、田山花袋などが見舞いのため滞在しました。昭和に入ると、映画監督の小津安二郎が、脚本執筆のため定宿としました。

中村楼

東京江東中村楼の支店として、明治三十二年に現在の恵泉幼稚園付近に敷地三万坪を有し「海水浴御料理旅館」として開業しました。九代目市川団十郎が茅ケ崎の別荘「孤松庵」滞在中にハヤシライスを注文したとのエピソードも残っています。川上一座の「オセロ」では舞台稽古を行った場所。明治四十年本店が東京美術倶楽部に売却され閉店、その後関東大震災により建物は全壊しました。

萬松園（ばんしょうえん）

明治三十五年八月、欧州公演旅行を終え帰国した川上夫妻は、茅ケ崎の萬松園に居を移しました。彼らは茅ケ崎を日本での演劇活動の拠点にしようと考え、鉄道線路沿いに俳優学校のための土地も購入しました。萬松園は、敷地の広い部分が山林となっており、そこでロバや山羊、豚やアヒルなど、様々な動物を飼っていたそうです。その後、実業家の原安三郎により購入され別荘「松籟荘（しょうらいそう）」に、現在は高砂緑地（たかすなりょくち）となっています。



生い茂る松林、海に臨んで広々と波打つ砂浜、風の音に、海の音。明治時代、茅ケ崎駅南口から海岸にかけては、現在と比べて集落が少なく、背の低い松林や桃畑、桑畑、芋畑などの間に、別荘地が点在するのみでした。茅ケ崎において別荘文化が生まれたのもこの頃です。明治期以降に開拓された、古いしがらみの少ないこの地に、別荘族たちがモダンな文化を持ち込み、洋風建築物や海水浴、自転車、音楽など、独自の文化が醸成されていったのです。

ぜひ地図を片手に、今とつながる当時の風景を感じ、近代芸能史の立役者たちの足跡を辿ってみませんか？

企画・編集　川上音二郎没後百年・川上貞奴生誕百四十年記念事業実行委員会
協力　茅ケ崎市商店会連合会
発行　一般社団法人　茅ケ崎市観光協会
住所　〒二五三-〇〇四四　茅ケ崎市新栄町十三-二九
電話　〇四六七-八四-〇三七七

文学に見る明治の茅ケ崎

「砂の白きに埋もれて青麦はまだ芽を見せず…茅ケ崎停車場（ステーション）の裏手。路ならぬ路を踏んで砂山を越し松原に入り、まだ初雪を見ぬこのごろ に梅の咲く宿を訪れた。・・・」

江見水蔭作の『霙（みぞれ）』は、川上音二郎・貞奴邸近くの旅館・茅ケ崎館（現存）で、川上一座が脚本の〈本読（ほんよみ）〉を行った時のエピソードが背景となっています。音二郎や貞奴をモデルとした人物（浜水城・美香子）が登場するほか、女優から永井荷風の妻となり、離縁して日本舞踊の藤蔭（とういん）流を創始した藤蔭静枝（ふじかげしずえ）（一八八〇―一九六六年）などが登場します。また、当時の茅ケ崎駅南側～海岸付近の風景が数多く描写されていることも特徴です。ここでは、『霙』の中に描かれている情景描写、そして現存するいくつかの写真を手がかりに、明治末期の茅ケ崎の風景をたどります。

※『霙』本文内の情景描写をもとに、登場人物が通った道を推測しました。

『霙』には、茅ケ崎駅から萬松園、そして千波屋（せんばや　※茅ケ崎館がモデル）までを歩く道すがらの風景が各所に描写されています。当時（明治末期）の茅ケ崎駅南側は、砂山や松林、畑などの間に別荘が点在するのみで、「路ならぬ路を踏んで」「梅の咲く宿」（現・高砂緑地）、そして千波屋まで行ったと書かれています。そして、その道すがら、貞奴が女優として舞台に立つ決心をするやりとりが描かれています。

「どうですか？極（きま）りましたか？」

……（中略）…

「あッ、妾（わたくし）ですか……ええ、極りました、とうとう出る事になりました」

まさにこの道のりこそ、「日本の女優第一号が生まれた瞬間」なのです。

茅ケ崎八景「高砂ノ明月」（高砂緑地から見る月）

① 茅ケ崎駅～高砂の川上邸（萬松園）

砂の白きに埋もれて青麦はまだ芽を見せず。桑に葉はなし甘藷は蔓のみの畑、これを幸いの間道にして、行来の人の足跡の多いのに釣込れた我、正しき路を捨て、ついとなたを取って行く茅ケ崎停車場の裏手。路ならぬ路を踏んで砂山を越し松原に入り、まだ初雪を見ぬこのごろに梅の咲く宿を訪れた。

【解説】当時、駅の南側は、民家や舗装された道が殆どなく、砂山や松原であったことがわかります。

② 川上邸～茅ケ崎館

砂原を過ぎ、松林を通り、向こうの岡の千波屋という海水浴館に急いだ。

『どうですか？極りましたか？』

我は松林を出て砂原に一歩踏入った時にこう問い掛けた。

【解説】千波屋（せんばや）は茅ケ崎館がモデルになっていると思われます。

茅ケ崎八景「天山ノ晴嵐」（海岸から茅ケ崎館を望む）

③ 茅ケ崎館の縁側～海に降りる崖

一人あらんも淋しさに、椽側へ出て芝原を見渡し。何心なく庭草履穿きて、芝原のはずれの畦なす端まで進み出で、これより波濤のごとく高低幾畳の砂山を見渡し、そのまた先きに雲の簇（むら）がるごとき海を見出して、浪の音を引き寄せたのか、松の風が突き遣ったのか、我は知らず知らず崖の下へ降った。

【解説】当時、茅ケ崎館の庭先を下りると海まで砂丘が広がっていました。

④ 海を臨んで広がる砂丘

意外の深谷？急に人界と隔って砂山と砂山。ここからはもちろん海は見えぬのである。

急いで前面の砂山に駆け登って見ると、後には横に広い千波屋の客座敷が、芝居の書き割りのように見えて、深谷の感はすぐと消えてしまうのである。

【解説】当時は海際に広範囲に亘って砂の山がいくつも連なっていました。砂山の間の谷に降りると、海が見えないほど高かったことが見てとれます。

明治～大正期の南湖院周辺の風景

明治～大正期の海岸付近の風景

⑤ 小松原

我は、それに従うて行くと、砂原から小松原 に入った。松の丈は袖でその頭を撫でるくらいである。路の幅は辛うじて草履が踏（ふみ）入れられるほどである。袖を縫わんとする松葉の針、糸を引きたる蜘蛛の巣を払うて、我また縫うて行く路の幾曲り。まだ海までは遠いのである。

【解説】海の近くには、砂原の脇に、植えて間もない背の低い松の生えた「小松原」がありました。

⑥ 砂山の上から江の島方面を見渡した様子

浪静かなる相模灘に白帆はまた五個六個、一個は黒き帆の動かず、と見しは名代の烏帽子岩（えぼしいわ）で、雲間になき南方の端に烟を吐く大島の幽か。さてはこの日を初霞、あるかなしかに包まずるか。江の島や如何ならんと眼を東北に転じた時に、あたかもわが視線を導くかのよう、千鳥の群は彼方（かなた）に飛んだ。なつかしの江の島や、腰越の突角、片瀬の高台。

明治～大正期の海岸付近の小松原の風景

⑦ 茅ケ崎館～川上邸～茅ケ崎駅

一人俥を命じて、千波屋を出る。通り路であるから、浜の住居に立寄ったけれど、夫婦もまだ眠りから覚めぬとの取次の言に、然（しか）らば、よろしく伝えてくれと言いのこして、停車場へと走らした。

【解説】「浜の住居」は川上邸を指します。

新設の駅だけに、建築は可なり広く、新ただけに四辺（あたり）が清らかである、その中に我一人……駅夫等もおのおの室に入ってまだ出来らぬ

【解説】明治三十一年にできた茅ケ崎駅は、当時まだ新設の駅でした。当時はまだ南口はありませんでした。

明治～大正期の茅ケ崎駅の様子

明治～大正期の茅ケ崎駅の様子

【協力】茅ケ崎市文化生涯学習課・茅ケ崎市美術館・小川稔・茅ケ崎館・大磯町立郷土資料館・水沢不二夫（文学研究者）・島本千也（地理・地域研究者）・増山恒雄・荒井良雄（東京大学）・橋本雄一（北海道大学）・中村康子（東京学芸大学）・村田彩子・野崎幸夫　（敬称略）

【制作】

○江見水蔭（一八六九―一九三四年）

岡山県岡山市出身。文学作品を始めとし、推理小説や冒険小説、探検記など様々な作品を残したほか、硯友社に属し、博文館などの出版社で雑誌の編集発行に関わった。明治三十六年に、欧州公演から帰朝した川上音二郎を翻案する。また、片瀬海岸から烏帽子岩に船で行く『姥島探検記』など、冒険小説も数多く残す。代表作に小説『女房殺し』、『地底探検記』、随筆『自己中心明治文壇史』など。

昔の道を歩いてみよう
茅ヶ崎と藝能 まちあるき
～川上音二郎・貞奴を中心に～

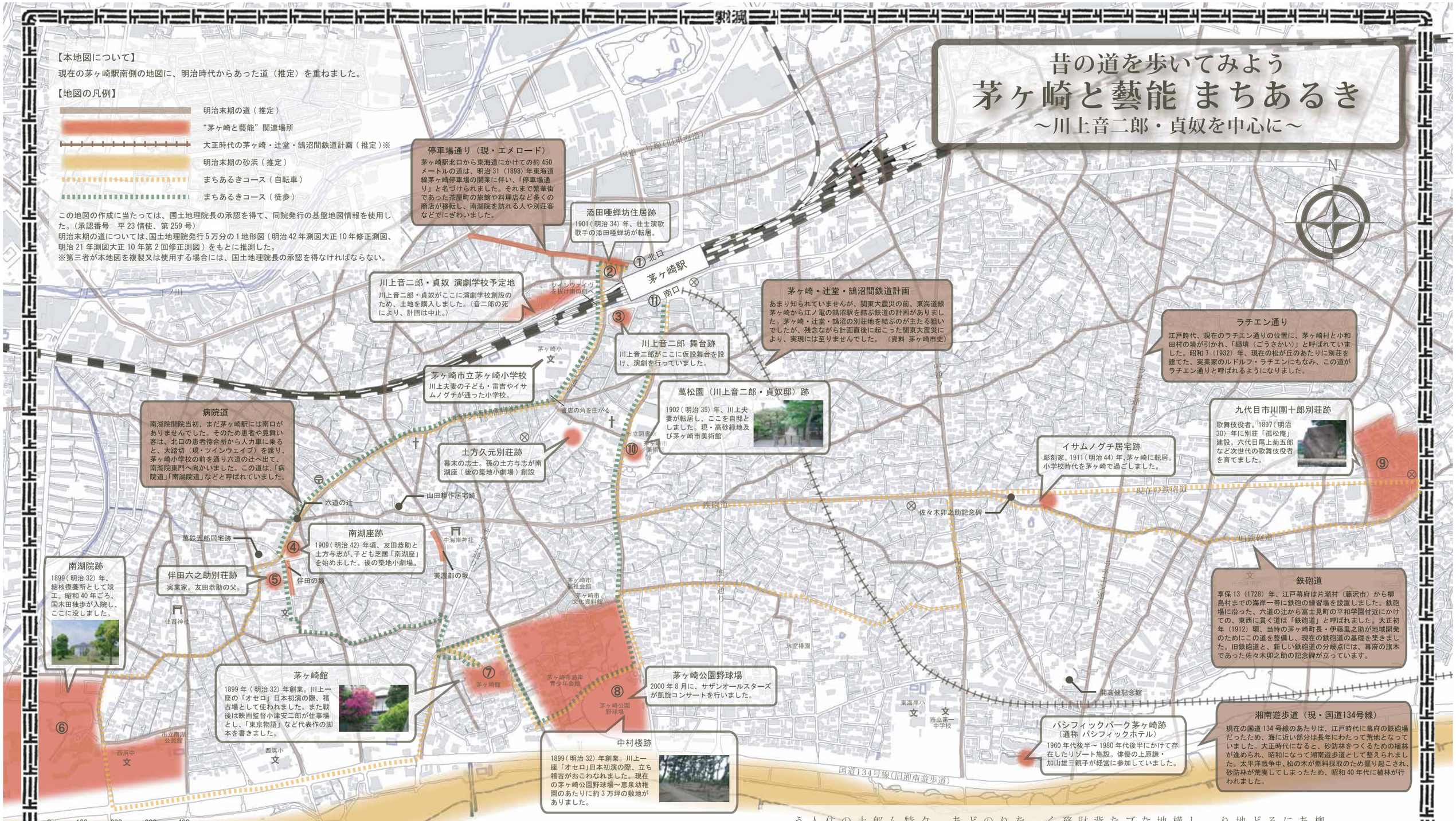
【本地図について】

現在の茅ヶ崎駅南側の地図に、明治時代からあった道（推定）を重ねました。

【地図の凡例】

- 明治末期の道（推定）
- “茅ヶ崎と藝能”関連場所
- 大正時代の茅ヶ崎・辻堂・鵠沼間鉄道計画（推定）※
- 明治末期の砂浜（推定）
- まちあるきコース（自転車）
- まちあるきコース（徒歩）

この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号　平 23 情使、第 259 号）
明治末期の道については、国土地理院発行 5 万分の 1 地形図（明治 42 年測図大正 10 年修正測図、明治 21 年測図大正 10 年第 2 回修正測図）をもとに推測した。
※第三者が本地図を複製又は使用する場合には、国土地理院長の承認を得なければならない。



おすすめコース

徒歩（約一時間）

① 茅ヶ崎駅北口 —2分→ ② 添田唖蝉坊居宅跡 —3分→ ③ 川上音二郎 舞台跡 —15分→ ④ 南湖座跡 —3分→ ⑤ 伴田別荘跡 —10分→ ⑦ 茅ヶ崎館 —5分→ ⑧ 中村楼跡 —10分→ ⑩ 萬松園跡 —5分→ ⑪ 茅ヶ崎駅南口

自転車（約一時間）

① 茅ヶ崎駅北口 —1分→ ② 添田唖蝉坊居宅跡 —2分→ ③ 川上音二郎 舞台跡 —8分→ ④ 南湖座跡 —2分→ ⑤ 伴田別荘跡 —7分→ ⑥ 南湖院跡 —10分→ ⑦ 茅ヶ崎館 —3分→ ⑧ 中村楼跡 —15分→ ⑨ 九代目市川團十郎別荘跡 —10分→ ⑩ 萬松園跡 —3分→ ⑪ 茅ヶ崎駅南口

茅ヶ崎駅南側の風景
―明治後期～大正十年

茅ヶ崎の海岸線の地区は、南湖・柳島・浜竹など古くからの集落はあったが、その大部分は明治期以降に新開地として開拓された土地である。土地の大半は、古いしがらみなどは少ない土地であった。土地は砂地であり、農業的には恵まれない実りの少ない土地であった。

そこに、明治半ば以降、別荘地としての利用価値が生まれた。東京・横浜の商人や政治家・官僚などが土地を取得、別荘を建設するようになった。鎌倉や大磯などの別荘地ブームからは十年以上は遅れていた。停車場の開設が遅れたのがその背景であった。別荘族についても、財閥・豪商・政府の大官よりは、内務官僚や学者・芸能人などが目につくのも特徴である。

彼らは、都会のモダンな生活文化を持ち込んできた。洋風建築物であり、あるいは、自転車や自動車などの乗物であり、海水浴やキャンプなどの当時としてはモダンな文化であった。

特に、茅ヶ崎には芸能史のエポックメイキング的な別荘があったのが特徴であった。九代目市川團十郎(だんじゅうろう)、新派劇の川上音二郎・貞奴、築地小劇場の友田恭助・土方与志などである。その芸能史上の場所の記憶が、昭和の上原謙の居住や加山雄三、桑田佳祐などの芸能人を生む土地柄につながっているように考えられる。

地理・地域研究者　島本千也